



ルー
テル

藤が丘だより

発行 月報委員会

発行日 2022年9月4日

№.

100

だれでも高ぶる者は低くされ、
へりくだる者は高められる。
ルカによる福音書 14章11節



礼拝献花より

御言葉に生きる

実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。
ローマの信徒への手紙 10章17節

ルター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: fujigaoka@jelc.or.jp



シリーズ説教

『小さな鍵』

牧師 佐藤和宏

ルカ14章1節、7～14節

今日の日課に、「小さなカギ」があるのではないのでしょうか。これは私の想像でしかないのですが、「小さなカギ」となっているのは14章1節なのではないかと思うのです。わずかに1節のことですが、その意味するところを読み解こうとすることで、日課の流れが「神の国の席に着く」ということよりも、大切な主題があると思われるのではないかと思うのです。ここで「小さなカギ」となっている、1節に目を向けたいと思います（聖書略）。確かにこの1節が、7節以下にみる教訓が語られた、背景を明らかにするために有効であることは間違いないでしょう。なぜなら、7節以下の教訓につながる、人々が上席を選ぶ様子が「ファリサイ派の議員の家での出来事」と、1節で明らかにされているからです。つまり、ファリサイ派の人々が競って、上席を選んでいるというのです。そ

の様子は、自分たちがいかに律法を守り、救いにふさわしいかと互いに比較して、自らを誇っているようにみえるのです。

改訂前の聖書日課において先週にあたる福音の日課は、すでに触れられたようにルカによる福音書13章22節以下になります。「狭い戸口」と小見出しがつけられているのですが、それはイエスが「狭い戸口から入ることに努めなさい」と教えられていることによりです。先に触れましたように、二週にわたって神の国での宴席の様子がたとえられるのですが、「狭い戸口から入る」ことも、「上席を選ぶ」ことも、人の努力の結果について言われているという点で共通しています。ファリサイ派の人々の立場からするならば、いかに律法を遵守しているか、これが狭い戸口から入るということであり、その結果、上席に着くことができるようになるでしょう。しかしキリストが告げる平和が、決して人の努力によるのではなく、キリストの十字架によるということからするならば、2つの日課はふさわしいとは思えなくもありません。これに対して改訂後の流れにおい

て、この1節にみる「小さな鍵」が明らかにしているのは、この教訓が「安息日」にされているということな

のです。「ファリサイ派の家で」という場所のことより、「安息日」と『いつ』に着目してることがわかります。こうして「小さな鍵」は、前の週の日課を「狭い戸口から入るよう努めなさい」という、人の努力を促す教えから、10節以下にみる「安息日に、婦人を癒す」という場面へという大きな変更をもたらしたのだと思うのです。この流れの変更が私たちに示しているのは、神の国での宴席という将来についての教訓から、「安息日」に関する今の生き方についての教訓への変更には違いありません。先週の日課でもありました安息日のいやしの場面では、「安息日にかかる仕事もしてはならない」と主張する人々に、イエスは「安息日によ

が「いかなる仕事もしてはならない」と命じるのは、神の命令に従って人々が休むことよって、弱い立場の人々もまた心身ともに安息を得るためであると

言われているのです。このことから小さな鍵がもたらしたのは、将来、神の国での宴席に着くのにふさわしく生きることを教える教訓から、キリストがその十字架によってもたらされた神の平和のうち、「今」という時を弱い立場の人々どどのように生きるか」という、主題への変更にはほかならないのです。しかしこのことは、将来の神の国での宴席を無視しているではありません。弱い立場の人々と共に生きるという神の御心に沿った命こそ、安息日の戒めを通して主が求めておられることであり、また神の国の宴席で、自らの努力の結果ではなく、ただキリストの十字架よって、上席へと招かれるということなのです。それは、主イエスがまず獲得された平和に関する生き方であり、このキリストのゆえに私たちは、すべての人々と共に、『今』という時を喜んで生きるのです。（聖霊降臨後第12主日）

証し「育ててくださったのは」 ○山○子

今から7年半程前の2015年のお正月、私はなんとかおせちは作ったものの、不安の塊のようになって三が日を過ごしていました。というのは翌4日から夫、○が入院と決まっていたからです。

夫は、その前月の暮れの12月のよりによって24日イブの日に、「食道がん」と告知されたのでした。私の『頭真つ白』をよそに「神さまもたんでもないプレゼントをくださったなあ」と冗談半分と言う夫。夜のイブ礼拝には、「行くよ」と一言。

その夜も、眠れない私の横でガーイーびきをかいて寝ていて、一体この人はどうなってるのかと、呆れながらなんだかちよつと救われた気持ちだったのを思い出します。

結局その年の2月に、11時間にも及ぶ食道全摘出の大手術を受けて、50日後に無事退院しました。

50日も掛かったのは、なにしろ、せつかちというか、食いしん坊というか、喉元の傷が治らないうちに、どんだんいろいろなものを先走って食

べてしまうからでした。

手術後はもちろんしばらく絶食でしたが、お医者さまから「今日から水をなめていいよ」と言われるともう水を飲み、「お水を少しずつ飲んでいいよ」と言われるともうアイスクリームを食べて・・・で、喉元の傷からアイスクリームがしみ出して、傷がふさがらず、また絶食状態に。

これを2度も繰り返しました・・・それでも、とにかく、前向きで悲痛な表情は一切見せず、私は回復していく夫の様子が嬉しくて、結構楽しく(?)毎日1時間以上かけて病院に通ったものです。

退院後も、全く普通の生活でした。元々食いしん坊の夫でしたが、さすがに手術のあとは思うように食べられず体重が減り、本人はどんなにか悔しかったことかと思うのですが、それでも活動はなるべく今までと変わらないようにしていました。

日曜日は教会へ、水曜日の聖研も休まず、週1回は町田まで英語会話

スクールへ、その他、古文書の勉強会、青葉区のOB達の集まり、また地元の郷土史愛好会の散策・・・

そんな生活にも慣れてきた3年目の6月に、がんが喉の下の気管支横に再発。

声帯への神経を刺激して声がかすれ始め、とうとう息だけでささやくような声になってしまったのです。

再発しても何か治療法はあるものと思っていたのですが、気管支に浸潤したガンを取り除くことは外科的に出来ず、また夫の場合は、もともと喘息にCOPDも持っていたので、肺に負担がかかる放射線も使えず、抗がん剤もかなり過酷でかつ効果よりも肺へのダメージが大きいものばかり。

治験や最先端の治療法まで検討していただいたのですが、細かい適用条件が合わずで、こんなに医学の発達しているのに何も打つ手がないなんて・・・信じられませんでした。

あれこれ治療法を探していたこの数か月は、ほんとに絶望的になるほど、辛い時期でした。

ちょうど発表されたオプチーボも最後に提案されたのですが、これも過酷で条件的に夫にとってはちつとも夢の抗がん剤とはならず・・・。家族、兄弟、親戚にも相談の上、最後まで自分らしく生きたいという本人の希望を尊重し、「何もしない」ことにしたのでした。あれこれ治療法に奔走してくださった主治医の先生は、きつと嫌な顔をされると覚悟して報告したのですが、意外なことに、「うん、僕、それ、いい選択だと思うよ」と言ってくれたのです。(そして「何もしないのではなく、必要に応じて治療はするからね」とも。)

それからの2年、夫はますます平常心で暮らし、亡くなる1年前の2019年の春には思い切って娘たちが住んでいるドイツに行きました。向こうで何かあっても覚悟の上でしたが、幸い何かあるどころか、夫はとても元気で滞在を楽しみ、ドレスデンへの小旅行も楽しんで、無事に帰国。帰国後も不思議なほど元気でした。

夫は2020年の5月の初めに亡

くなりましたが、その年の1月まで、つまりコロナが始まる前まで毎週礼拝に出て、最後は1月の最後の週にあつた総会にも出ました。息だけの声で発言もして、恒例のお昼のお弁当時間のあとには、何人かの方が、私のところに来て「○さん、完食よ」、「全部ちゃんと召しあがったわよ」と嬉しい報告をしてくださいました。家では、どんなに柔らかく、細かくしてもしょつちゅう喉に詰まらせ、私は青くなつて背中をたたきながら今度は救急車か、と思うことが多かつたのですが、不思議と外では、また好きなものを食べる時には、喉を通るし、ちゃんと胃袋にも収まるのです。

礼拝後に私のところに来て「ご主人、ほんとに病氣？」と聞かれた方もいました。夫にそのことを伝えたら、ちょっとニヤリとして我が意を得たりとばかり満足気でした。夫に見てみれば、病人らしくなく普通の自分に見てもらえるのが一番うれしかったのだと思います。

発病以来5年4か月の間、ほんとにいろいろありましたが、一度も弱

音を吐いたり自暴自棄にならず、いつも全てを受け入れて普通にしているのか私も一緒にいながら不思議に思うことでした。

それは、半分は、自分のたばこなどの健康管理の悪かつたせいだから、人に練り言は言えないと、いさぎよく思っていたのもあるでしょう。

また、へなちよこの私への気遣いも多分にあつたことは、後で周りの方々のお話で分かつたことですが、そして、お蔭で私は自分の生活をそんなに変えることなく、がいつもの様にしているの、私もいつもの様に暮らすことができたのです。

夫を病人扱いせず、口げんかも遠慮なくしました。それでも私は時折ひどく心配になつて、大丈夫（？）と聞くのですが、すると夫はいつも「大丈夫だよ、全て神さまに任せてるから」と普通に言うのです。それどころか「ちゃんと頼んであるからさ」なんて、彼特有の冗談というかおどけて見せたりして、私は笑うしかありませんでした。

夫の大切にしていた聖句は、ロマ書の5章1節〜5節「…苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む…」というところでした。生まれてすぐに母親をなくし、苦難も忍耐もたくさん経てきた人ですから、練達は希望をそしてこの希望は失望に終わることはない、ということを、この病を通して真剣に信じ、神さまに全幅の信頼を寄せていたでしょう。

ガンは気管支に浸潤し、呼吸にも障害が始め、最後は酸素吸入器を備えなければならなくなりました。亡くなる半年前に、「最後まで家で」という夫の希望を知り、訪問診療の先生と訪問看護のスタッフの皆さんがその方向で動いてくださることになりましたが、ほんとにそんなことが出来るのかしらと私は漠然と不安とともに思っていました。

亡くなるひと月前の4月には、体調が良いと「さあ、行くよ」と、車に酸素ボンベを乗せて、毎年必ず訪れていた桜や菜の花やサツキなどがきれいな場所やお寺や野原や林に次々と出かけました。この頃には大

分呼吸も苦しくなつていたはずですが、不思議と外では全くボンベは使いませんでした。

5月に入り、夫は少し体調が悪くなり、それでもノンキな私が、佐藤先生にちよつと具合が悪いとメールを差し上げたのが7日でした。先生はびっくりするほどすぐ飛んできてらっしゃいました。ベッドの夫は先生に聖書のことでも聞きたいことがあつたようで最後まで聖書を聞いて質問していました。

その夜の明け方、8日の明け方ですが、ベッドに寝付くようになってからたつた2日で、夫は穏やかに、さつと駆け抜けるように旅立ってしまいました。

「最後まで家で」はもちろん、偶然というか不思議というか、最期は私の腕で、でしたから、夫の希望は見事に叶えられたのです。

日吉教会で結婚式を挙げてから48年、ずっと二人で一緒に教会生活を続けてくるのが出来ました。これが何よりの私たちの誇りであり、またご褒美だと思つていきます。

急に一人の生活になって、もちろん悲しく、寂しく、不安いっぱいでした。そんな私を周りの方々、そして神さまがほんとに支えてくださって、もう2年になります。

ミッション系の中学校で出会った讚美歌や聖書の言葉はいろいろありましたが、まだ訳も分からず不思議な気持ちで覚えた、たくさんのお聖句の中に、何かにつけて思い出す、とてもシンプルで分かり易いある聖句があります。

「私は植え、アポロは水を注いだ。しかし成長させてくださったのは神である。」(コリント一3章6節)

ちなみに私は中学の時に習ったまま、「成長」ではなく「育ててくださった」という形ですと覚えてました。「私は植え」の「わたし」とは、このコリント書を記したパウロのことです。ですから登場人物はパウロとアポロと神さま。三者の行動もはっきり。

他に難しい言葉はありません。これ以上何も説明が要らないくらいです。

でも、このシンプルな聖句に私はとても確信に満ちた暖かいものを感じてきました。

今回、この聖句を取り上げて、この二つの文を繋ぐ接続詞が「しかし」だということに気づきました。「そして」でも良さそうなのに、「しかし」です。

そこにこの言葉の厳しさも感じました。

私たちは植えたり水をやったり、いろいろのお世話をするけど、一番大事なこと、つまり「成長させて」くださるのは神さまだと言いつけるのです。

この聖句に続く3章7節には、「ですから、大切なのは植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。」とはっきり書いてあります。

私たちは、いえ、私は、自分がやった、自分で作った、自分で選んだ、自分で行った、自分で、自分で・・・と、まるでいつも自分が中心で動いているみたいに、挙句のはてには結果は全部自分のものみたいに思いがつてしまうことが何と多いことか

と、気づかされるのです。大きな方の力が確実に働かれることを感じるのと、謙虚な気持ちになります。謙虚になれば見えてくることはほんとにたくさんあるのですから、私は反省ばかりです。

でもこの聖句の一番の大きな希望は、私たちの水やりが多少良くなくても、ちよつとさぼって(?)いても、神さまが最終的には育ててくださるということです。

そして「神さまが育ててくださる」ということは、神さまが、いつも「そばに居て支えてくださる」ということに他なりません。そして最後まで神さまが責任をもって見守ってくださいということなのです。

「しかし」という逆説の接続詞の厳しさとは裏腹に、「成長させてくださったのは神である」というところに、こんな大きな希望、安心、あたたかさが入められているのです。

そして、さらに嬉しいことは、神さまの分野の他に、「植える」「水を注ぐ」という、私たちに出来ること

もちゃんと用意して下さっていることです。これもまた大きな恵みであり、救いだとは感じています。

私は一人になってしまいましたが、最後は神さまが全部引き受けてくださることを確信しながら、これからもう下手でも水をやり続けたいと思います。

そう言えば、夫も最後まで飄々と水を注ぎ続けた人だったと、あの可笑しさ、楽しさがちりばめられた暮らしぶりを思つて、少し納得しました。

神さま大好き、教会大好き、聖書大好きでした・・・。

そんな夫を、そして私を、育てて引つ張つて、ここまで連れてきてくださったのは他ならぬ神さまなのです。

「私は植え、アポロは水を注いだ。しかし成長させてくださったのは神である。」

たくさん意味と大きな希望とめぐみが詰まったこのシンプルな聖句、私はますます好きになりました。

江〇〇子さんを偲んで

藤が丘教会初代牧師、江〇再起先生のお母さまであり、また藤が丘教会でも親しい交わりをいただいた、江〇〇子さんが、7月30日に召天されました。99歳でした。私を含めて、面識のない方もおられると思います。が、40年の歴史の中で、大切な信徒の方について知る機会としたいと願ひ、数人の方に思いを書いていたいただきました。(佐藤)

●江〇〇子姉の召天のお知らせを頂き、大変寂しく、悲しいです。江〇〇姉は藤が丘教会創立時の江〇再起牧師ご夫妻を寄り添い、支え続けました。藤が丘教会は、〇子姉の支えとお祈りで今があると思います。天国から、神様と江〇牧師と私達を見守ってください。(名〇〇代)

●なつかしい江〇夫人／私が小学生の頃、父が熊本の室園教会の牧師、そして江〇武憲先生が水道町教会(現熊本教会)の牧師でした。父と江〇先生は神学校からの付き合い。

もちろん熊本では家族ぐるみの仲良し。お互いの家を訪問し合いました。私が高校を卒業する迄続きましたが、熊本を離れてからは、仲々お目にかかる事がありませんでした。

藤が丘教会が出来ました時、私は青葉区に住んで居りましたが、東京教会に行っていました。両親が我家に泊まりに来た時には、江〇先生ご夫妻が来て下さり、食事しながら熊本弁で大いに語り合い、昔話に花が咲きました。そしていつもおっしゃるのです。「〇子さん、藤が丘教会に転会しなさい。そして両親を早く呼びなさい。そしたらいつでも会える」と。

けれどもこの想いはかありませんでした。両親が我家に来る直前、江〇先生ご夫妻は小石川に移られたのです。この藤が丘で、いつも会っておしゃべりが出来るという夢は果たす事が出来ませんでした。

父が藤が丘に居た三ヶ月の間に、唯一訪問したのが小石川の江〇先生宅でした。あつという間に過ぎた時間。信頼し合い、無邪気におしゃべりしている4人の姿が目には浮かびます。

江〇夫人(昔からいいなれている呼び名)には、母亡き後も娘の様に可愛がって頂きました。お会いすれば熊本弁で昔話を、時が過ぎるのも忘れ、おしゃべりしたひと時。江〇夫人の楽しそうな笑顔。

私の胸の中にいつ迄も残り続けます。(〇井〇子)

●江〇夫人はとても聡明な方でしたが、飾り気のない明るい笑顔で皆様から「お母様お母様」と慕われていらつしゃいました。礼拝の時はいつも後ろの方に静かにお座りになつてご子息、江〇再起先生のお説教を聴いていらつしゃいました。どんなに幸せなお時間だった事かと思ひます。又筆まめな方で良くお手紙やお葉書を頂きましたが、びつしりと色んなお話が満載で読ませて頂くのがとても楽しみでした。晩年は新小岩のホームにお暮しで時々皆でお邪魔させて頂きました。頭の良さにはいつも驚かされましたが、他にも照井さんとお二人での熊本弁です。私達はさっぱり分かりませんでした。その時のかけ合いが本当に楽しそう

で今でも良く思い出されます。お歳

がお歳で仕方のない事ですが、とても寂しいです。(〇谷〇子)

●藤が丘在籍中はあまりお話しする機会は、なかったのですが、くも膜下出血で倒れた夫へ手紙をいただき、電話で話す機会が増えました。新小岩ホーム訪問に参加し、毎回、記憶の鮮明さ、江〇牧師と過ごされた教会での出来事、教会員のお名前を、スラスラと話して下さったことを思い出します。(〇田〇代)

●江〇〇子さんが99歳でなくなられたとの突然のお知らせに、私は動揺して涙が止まりませんでした。そろそろお電話を差し上げなくてはと、とても気になっていたところだったからです。

藤が丘教会の初代牧師である江〇再起先生のお母様。

江〇先生の着任の2、3年あとに、夫君で牧師でいらした武憲先生の退任に伴って、再起先生のお近くにご夫婦で越してらした頃、ちょうど私たちも横浜に引っ越して来て藤が丘教会に通い始めたのですから、本当に最初の頃からの交わりになり

ます。お住まいは教会前の大通りの一つ向こう側のマンションでしたから、よく遊びにも伺いました。

その後、○子夫人がお一人になられ、茗荷谷のお住まいから小岩のホームに移られてからも、私たちは先生のお母様を慕って、よく遊びに伺ったものです。

そこでいつも、○子夫人の口から出るのは、藤が丘教会の楽しかった思い出でした。

小岩のホームに移られてからしばらくして、○子夫人を藤が丘教会の礼拝にお連れするという『一大プロジェクト』を計画したことがありました。

日曜日の朝早く、小○さんが小岩まで車で迎えに行き、礼拝を共にし、帰りは私と夫でまた小岩までお送りしました。

この時は、○内○生さん(田○)○るみさんのお母様)、田○子さん、○村○美さんなど、懐かしい方々が集まってくださり、藤が丘をまるで母教会のように思ってもらった○子夫人は「最高に幸せな思い出」と後々

までもとても感謝されてました。

去年の晩秋に、最後に電話でお話した時にも、○子夫人のお声と話し方は以前とほとんど変わらず記憶も確かで、とても99歳というお歳を感じさせないものでした。私も嬉しくなってお歳も考えずに一時間も長話しをしてしまったことを思い出します。

いつも優しい話し方でいらつしやいましたが、お考えの芯はぶれず、くださるアドバイスはとても的確。教会の将来についても真剣に考えておられ、20歳以上も年上なのに、新しい讃美歌や式文への移行などの変化には私よりもずっと前向きで、いつも良い刺激をくださいました。

もう一度お電話でゆつくりお話しがしたかった、と思うと、また涙がにじみます。今頃は神さまの元で、それこそ懐かしい藤が丘の兄弟姉妹と相まみえていらつしやることでしょう。私たちの大先輩、大好きなお母さま、どうぞお安らかに。

(○山○子)

ウクライナ支援 感謝と報告

○野淑○

コロナの感染者が再び急増し、大雨による災害も増加し、心の休まる日が無い夏の始まりです。お変わりなくお過ごしでいらつしやいますか。2月24日、ロシアがウクライナに侵攻したことを、その夜のニュースで知りました。それから連日連夜テレビに釘付けになりました。

母親に抱かれたり、両手や背中にわずかな着替えをかかえて寒さの中心を歩く幼児の姿が特に心に焼きつき、この子どもたちのために何かをしてあげたい思いで、友人や知人に毛糸の帽子を編んでほしいと声をかけましたところ、北海道から九州までの23人の方々が80枚送ってくださいました。

これを確実に届ける道を在日ウクライナ大使館をはじめ、諸々の機関に打診しましたが、今日の世界的非常事態の許では大変に困難でした。幸い江藤直純、関野和寛両先生の暖かい支援を頂き、7月7日にポーランドのワルシャワで難民の支援に専念しているルーテル世界連盟(LWF)の責任者宛に発送することができま

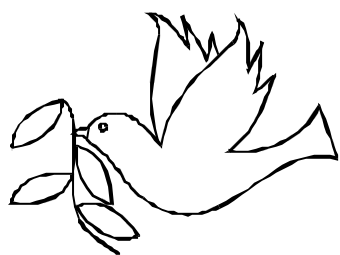
した。

遅くなりましたが、関わってくださいましたおひとりおひとりの皆様からお礼を申し上げます。

ウクライナに平和を！ と祈りつつ。

.....

○野さんは、文中にありますように、ニュースをみて、個人的に活動を思い立ち、呼びかけられました。尊い働きをぜひ教会の皆さんにも、分かち合わせていただきたいとお願ひし、関係者に送られた感謝と報告のお手紙を、今回転載させていただきます。心より感謝申し上げます。(佐藤)



宣教フォーラム「日本の伝統に生きる私たち Vol.3」

山〇〇子

7月9日の宣教フォーラムは、

2018年からの3回シリーズ「日本の伝統に生きる私たち」の最終回として行われました。今回は「日本の昔話から読み解く、日本人の文化意識とキリスト教」という題で、午

前中は立石展大先生（高千穂大学教授）の講演、また、午後からは、まとめとして「日本の伝統に生きる私たち」の文化意識と信仰心についてのシンポジウムがありました。（パネリストは立石先生、松谷信司キリスト新聞社編集長、菅原健 浄土真宗厳寺住職、司会は上村敏文ルーテル学院大学准教授）

会場での出席は49名。ユーチューブ配信視聴者は35名でした。

午前中の立石展大先生の講演では、「シンデレラ」や「桃太郎」の話などを例にされながら、一つの話が多くの人に伝えられていても、その国や地方の文化的背景や時代によって、話が内容や言葉が違ふとい

う、大変興味深いお話でした。

また、日本では、多くの神様の昔話があり秋田の、「なまはげ」など10件の来訪神行事が文化庁の国指定重要無形民俗文化財として申請されているそうです。そのほか、全国にある昔話もいくつか紹介してください、楽しい講演でした。

午後のシンポジウムは、①教会（仏教も含め）は今後発展していくのか、衰退していくのか、②宗教は若者に希望を与えられるのか否か、などいくつかの課題について各パネリストが、それぞれの立場から話されました。かなり広い、深い課題を限られた時間内で話し合われたので、話が広がり、わかりづらいところもありましたが、印象に残った点は下記のとおりです。

・日本はキリスト教系学校が多くあるなど、昔から異文化を取り入れてきているが、それが信仰生活に結びついていけないのが問題。
・キリスト教、仏教においても信仰

者が減っているが、神社仏閣などを訪れる人は多く、

孤独や、心の不安、心の拠り所を求めている人は多い。

・仏教でもキリスト教でも専門的用語が多く使われ、もう少し一般の人が理解しやすい、

また馴染みやすい言葉、メッセージの伝え方を考えるべき。

・特に、携帯、タブレットが中心の若者（特に20代、30代）は、文化、思考（生活様式、価値観）などにおいて、その上の世代とは大きく違う。教会としても、本来伝えるべきメッセージの伝え方は見直されるべきで、我々の認識、意識改革は必要である。

絵本、ゲームカード、映画、など伝達ツールはさまざまあり検討されるべきである。

・台湾、韓国のキリスト教、仏教信者はそれぞれ約30%ぐらいいいて、活発な社会活動をしている。台湾のある仏教教団より日本の東北震災時に寄付された金額が、日本の仏教教団総額よりはるかに多い金額だった事が紹介され、今後の日本のキリスト教会も仏教界においても、こうした

他国の信仰に対する意識、社会活動にヒントになることがあるのではないか。

個人的に、今の日本社会の構造そのものが、若い人を生きづらくさせてきているようにも思えますが、最後に、立石先生が、昔も今もグリム童話は子どもたちに広く愛されて夢中にさせている。本質的なところでは、昔も今も変わらないのではないかと、という話をされ、少し救われた思いでした。

何とか今を生きる若い人たちに、キリスト教が本来伝えるべきメッセージが届くようにと祈ります。



●吉○枇○子さんより

随分、昔のことになります。藤が丘教会のビスケット隊さんに鳥の餌台を作っていただきました。ヒマワリの種を置いておくと、しばらくしてカワラヒワがやって来ました。その後小さな庭に、シジュウカラ、ツグミやジョウビタキも来るようになりました。

梅雨明けの早朝、お隣の家の高いフェンスの上に、緑がかった羽の鳥がとまっているのを見つけました。しばらくの間、まわりの景色を眺めている様子でしたが、どこかへ飛んでいってしまいました。

それから二、三日した朝、道路の掃除をしていると、はじめは小さく「ケツキヨ、ケツキヨ、ホーホケキヨ」、次に大きく「ホーホケキヨ、ホーホケキヨ、ケツキヨ、ケツキヨ」と、電線の上であの鳥がさえずり始めたのです。サツサツと、ほうぎの音を立てても、平気でさえずり続けていました。今まで、ウグイスの姿を見たことがなかったので、とてもうれしくなりました。

●大○雪○さんより

2019年クリスマス礼拝で、皆様に見守っていただきながら洗礼をうけてから早くも2年半以上が経ちました。2020年春には1度目の緊急事態宣言が出されたので、私の中の礼拝はほぼグループ分け後と



なります。それに加えて、仕事柄なかなか日曜日に教会に行けず、洗礼の際にそばで支えてくださった皆様に感謝の気持ちもお伝えできぬままになっているように思います。そんな中、大○さん何か書きませんか?とお電話をいただきました。

私などが皆様に向けて書けることなど本当に無いのですが・・・。せっかくの機会をいただいたので、皆様に「踊りのススメ」?を書こうと思います。

行動制限は無いといっても、まだまだ私たちの生活はコロナの影響をうけ、時には気鬱になります。そんな日は、まずご自分の好きな音楽をかけてみてください。ジャンルはなんでもOKです。太鼓の音や波の音などの、自然音でもよいかと思います。そしてそれを聞きながら、体を動かして踊ってみてください。

ここでポイントとなるのが、体操のように筋肉を意識したり、フォームを気にする必要は全くないということです。決まった動きもありません。心のままに自由に動くことが大事です。踊りは全身を使うものだけではありません。足腰が痛いかたは座ったままで、どうにもだるい時は寝たまま、お顔の表情を動かすだけでもよ

いのです。体のどこかしらの動きに「感情」が入ったなら、それはもう立派な「踊り」となります。

心のままに、自由に、感情を解放するようなイメージで踊ってみてください。一曲終わるころにはほんの少しだけ気持ちがつきりとして深呼吸をしたくなったり、感謝の気持ちがあがってきたりします。人は太古の昔から踊ってきました。

踊りと言うと 無理!とおっしゃるかたも多いですが、実はどなたでもできることなのです。ぜひ、皆様も踊られてみてください。

詩編一四九篇より
踊りをささげて御名を讚美し
太鼓や豎琴を奏でてほめ歌を歌え
太鼓に合わせて踊りながら
神を賛美せよ
息あるものはこそぞつて
主を讚美せよ
ハレルヤ

●洗礼の信認式（アフアメーション）について

2022年度教会総会にて、ご承認いただきました通り、今年の待降節第一主日に、「洗礼の信認式」をいたします。耳慣れない言葉ですから、月報を通して数回にわたり、解説をさせていただくことになりました。宣教40年を機会に、年に一度継続してまいりたいと思います。

「アフアメーション」とは、「確認、肯定」を意味する言葉で、アメリカ福音ルーテル教会（ELCA）の式文に掲載されている、「洗礼を確認、

肯定する」式です。

カトリック教会の聖堂の入り口にある「聖水盤」について、あるカトリック教会のウェブサイトによります。聖堂の入り口には、聖水盤が置かれていて、入堂するとき手を聖水に浸して十字をきる習慣があります。これは、洗礼の約束を新たにし、神に清められたためです。側からは、ただ「清め」と結びついているように見えるのですが、第一に示されてい

今月の受洗記念日の皆さん

- 4日 ○田○代姉 5日 松○○太郎兄
9日 ○井龍之○兄、○林梨○姉
30日 吉○莉○姉、吉○朗兄、吉○樹兄

おめでとうございます。



ることは「洗礼の約束を新たにする」ということだと言われています。聖堂に足を運ぶたびに、洗礼を思い起こす。これがカトリック教会に受け継がれている習慣になります。

日本のルーテル教会では、取り入れられることなく、洗礼を確認する大切さを知らないまま過ぎてきたのでした。しかしアメリカのルーテル教会では、その式文に受け継がれているのです。

アメリカに滞在中、この式を体験した時、私は非常に感動し、ぜひとも日本の教会でも取り入れられる必要があると考えたのを覚えていま

■牧師室より

8月には宣教委員会を開き、昨年より皆さんにお願いしておりました、アンケート（デルファイ法）の結果を受けての発題（○田兄、大○神学生）、グループに分かれてのリアクション（○田兄、○野兄）と話し合いをいたしました。

今回の『デルファイ法』は、すでに月報（昨年12月号等）でお伝えしましたように、通常のアンケートと

す。この式の感動が冷めないうちに、日本にメールをし、市ヶ谷教会の浅野牧師に「洗礼の信認」と翻訳していただき、自らも式文の翻訳に着手いたしました。

人は洗礼を受ける決心をするまで、それぞれ長い道のりを経たことでしょう。洗礼を受けるまで、私たちは多くの場合、洗礼をゴールのように考えているからです。しかし本来、洗礼はスタートであり、信仰生活を生み出す、その時です。信仰生活の中で、繰り返して洗礼を「確認し、肯定する」ことは、必要不可欠な出来事と言えるでしょう。（佐藤）

は異なり、広く皆さんの声を集め、互いに意見を評価することで、小さな声を拾い、全体の声としていくことを狙いとしていました。おかげさまで、普段をお聞かせいただけなかった声を拾い上げることができたのではないかと思います。

今後、役員会を中心に、いただいた声をまとめ、方向性を定め、宣教40年の宣教計画としてまいりたいと思います。尚、説明不足があった点は、深くお詫び申し上げます。（佐藤）